

# 体験教育



夜明け前がいちばん暗い



2020年11月9日 ダンス部公演会・講堂



編集／体験教育編集委員会  
 発行／学校法人 明星学苑  
 東京都府中市栄町一丁目  
 〇四二二三八五二二  
 制作／信濃印刷株式会社

## 目次

### 幼稚園

「食育」を通しての活動

星まつり

年長組 キャンプファイアーと花火大会

### 小学校

一年生 すべてがはじめて

二年生 チャレンジすることを大切に

くぬぎの時間

〜雑草抜き〜力を合わせて頑張っています！

三年生 学び始めた三年生

四年生 向上心をもって

〜新たな活動への挑戦〜

クラブ活動

五年生 GOGO五年生！

ピンチはチャンス！

実りの秋「稲刈り」

六年生 コロナ禍で得たもの

いつもと違った 明星祭

おたのしみくじ／川で魚・ぎよ・ギョ

たからさがし／わなげ

ボールつかみ取りゲーム／クイズ明星王

### 中学・高等学校

コロナなんかには負けないぞ！

星魂たくましく

新型コロナウイルス対策・最前線リポート

### With Corona

新型コロナウイルスの影響による新しい生活様式を、生徒はどう受けとめたか？

高校三年九組 名取穂花

高校二年五組 関口愛奈

中学二年一組 嶋田 碧

「食育」を通しての活動

「食育」とは「食」を営む力を育てることです。「食」を通して様々なことを学び経験し、健全な心と体を育てることができます。

幼稚園では食品の安全に配慮し、子どもたちの健全で豊かな心身の育成のために、「食」に関する様々な体験を通して、「食を大切にすること」「食を育みたいと考え、食育活動を実践しています。」

その中の活動として野菜の栽培・観察・収穫、クッキングを行っています。

子どもたちが実際に自分たちで野菜を育て、身近な環境で生長する過程を見たり触れたりすることで、食べ物に興味や関心を持ち、偏食をなくすきっかけにもなります。自分たちで育てた野菜を収穫し、調理をして食べる時、ひとときうれしく感じることでしょう。こうした活動を通して「食」への興味が広がります。

私たちが生きていく上で、なくてはならない「食」について、生産や消費、SDGs（持続可能な開発目標）にも繋がる「食品ロス」などの基礎的な意味を分かりやすく知らせ、将来「食を楽しむ」ことができるようになってほしいと願っています。

実際に見て触れることで食への興味が広がります



収穫した野菜に興味津々

見て見て～！トマトができてるよー！



とっても大きなきゅうりだね～



立派なナスが育ちました



上手に剥けるかな？



ひとりですべてできるとうれしいね！



食材の準備も自分たちで



みんなでゼリー作り

みんな真剣な表情です



☆☆☆星まつり☆☆☆



このおたまで  
すくってね。  
はい!!

上手にできるかな、  
ちょっとドキドキ...

今年度の星まつりは、年少組はお部屋で、年中組・年長組はホールでクラスごとに開催しました。法被を着た先生たちの姿や、保育室前に飾られた提灯を見て、普段と違う雰囲気ワクワクしたところでしょう。様々な色のヨーヨーを見て、お友だちと何色にするか悩みながら選んだり、くじ引きでは紐の先には何があるかな?とドキドキしながら引いたりする表情がとても印象的でした。例年よりも縮小した形での開催となりましたが、順番に太鼓を叩いたり、クラスのお友だちと盆踊りを踊ったり、お友だちと景品を見せ合い喜び合うことでお祭りの雰囲気を楽しみ満喫することができました。



ホールに行って太鼓も  
叩きました



女の子にはやっぱり  
ピンクが人気みたいです♪



しっかり並んで  
順番も守れるよ!



この色のひもにしよう!  
どどんひっばるぞ

何色の景品かなー / 緊張しちゃうな



あの色が欲しいな、がんばるぞ!



クラスに紙芝居屋さんが  
来てくれました♪



年長組

# キャンプファイヤーと花火大会



今年度は「星まつり」と「年長組お泊り保育」がコロナの影響で中止となった為、幼稚園生活最後の年長組を対象にキャンプファイヤーとミニ花火大会を実施しました。

親子で一緒にゲームをしたり「キャンプだホイ！」を踊ったりし、短い時間ではありましたが、特別な時間を過ごすことが出来ました。

花火は有志のお父様にお手伝いいただき、幼稚園の屋上から点火していただきました。夜空に吹き上がり落ちていく花火はとても美しく、きらきらと輝く花火を見上げる子どもたちの姿がとても可愛らしかったです。

お土産にはお祭りの雰囲気のできるフランクフルトが提供され、担任から嬉しそうに受け取る子どもたちでした。

幼稚園生活最後の一年間、行事や活動が自粛される中、保護者の皆様と園の教職員とで協力し合い実現できた素敵なイベントでした。



キラキラと輝く打ち上げ花火



親子で花火に夢中「きれいだね！」

フランクフルトくださいな！



素敵な思い出になりました！



# すべてがはじめて 一年生

明星小学校に入学することを心待ちにしている中、初めての顔合わせは、画面越しの遠隔授業でした。遠く離れてはいましたが、制服や校内着に着替えて、やる気満々で参加してくれた子どもたちも、とても頼もしくみえ、小学校への期待にあふれている様子が伝わってきました。

ようやく、会えた六月の入学式。雨が降る中でしたが、元気に登校してくれました。校長先生から、「みなさんで、さわやか探しの旅に出かけましょう」と笑顔でお話をいただき、さらに期待で胸を膨らませることができました。

入学式を終えると、二つのグループに分かれての分散登校。担任以外の先生方にも朝から帰りまで担当していただき、避難訓練や学校探険、くぬぎの時間など、一つひとつの活動に



目を輝かせて取り組んでいました。七月中旬からは、全員揃ったの授業となり、友達の多さに圧倒される子どももいました。『友達、百人できるかな。』という歌詞も叶えられる、百十一人での学校生活がようやく始まりました。

子どもたちはもちろんですが、保護者の皆様にとっても担任にとっても、忘れられない一年になることは間違いありません。この出会いを大切に、当たり前に過ごせることに感謝して、たくさんのお出をみんなで作ってくださることを願っています。

(文責 一年担任)

# 二年生 チャレンジすることを大切に

今年度は、コロナウイルスで思うように学校生活が始められませんでした。学校が始まってから、何事にもチャレンジし元氣いっぱいにごしています。

## くぬぎの時間

くぬぎの時間では、「冬の野菜を植えよう！」をテーマに、種の観察や、畑の雑草抜きをして、着々と準備を進めています。

また、明星祭の前には、自分たちで作ったりすることにチャレンジしました。

明星祭当日は、自分たちが作った魚や、釣り竿を使い、魚釣りを楽しんでいました。「ぼくの魚を釣ったよ!」「友だちの魚だ!」と笑顔で伝えあう声がこだまする良い日となりました。



雑草抜き  
力を合わせて頑張っています!



## 九九表にチャレンジ!

二年生では、「九九表をすべて覚えよう!」というチャレンジをしています。朝の時間や休み時間を使って、九九マスター(ミニ先生)になるべく、日々奮闘しています。



コロナウイルスの影響で、なかなか思うようにできないこともありましたが、日々の生活の中で、常に新しい発見をしたり、新しい考えを生み出したりし、エネルギーに溢れています。これからも、失敗を恐れずにも何でもチャレンジし続ける姿を楽しみます。

(文責 二年担任)

# 学び始めた三年生

初めての更衣室に、初めてのクラス替え、初めての教科……。初めてがたくさんの三年生になった喜びと期待に胸を膨らませていましたが、今年には新型コロナウイルスの影響で、例年とは大きく異なるスタートとなりました。

緊急事態宣言が発令され、Zoomでのオンライン授業やGoogle Classroomでの課題提出が始まりました。外出自粛期間中も、子どもたちは身の回りの不思議や「おもしろい」を発見したり、作ったりして、みんなに紹介しました。



分散登校が始まり、Zoomでのやり取りやメッセージカードの交換などでコミュニケーションをとっていましたが、最初は顔と名前が一致せず、よそよそしい感じでした。廊下に掲示された自己紹介カードをじっくり読む姿も見られました。



前期の行事がほとんど中止になり、関係を深める機会がなかなかありませんでしたが、学級活動や係活動が本格的に始動して、クラスの絆が強まってきました。機器の扱いにもだいぶ慣れ、登校再開後もくぬぎや社会の授業の中で、違和感なくiPadやZoomを使用できるようになりました。



これからの成長がますます楽しみです。  
 (文責 三年担任)

# 四年生

向上心をもって  
 新たな活動への挑戦

四年生になると、新たな活動が始まります。今年度は、新型コロナウイルスの影響でスタートが遅くなりましたが、子どもたちはその時、その瞬間を楽しみに、日々向上心をもって取り組んでいます。

## クラブ活動

三年生の時に、自分が所属したいクラブ活動を決め、楽しみにしていた時間の一つです。月曜日の活動日の朝は、「今日はクラブの時間が楽しい！」「早くクラブの時間にならないかな」という声をたくさん耳にします。

# クラブ



## マーチングバンド

特別編成として活動しているマーチングバンド。選ばれたメンバーですが、四年生から本格的に活動がスタートしました。

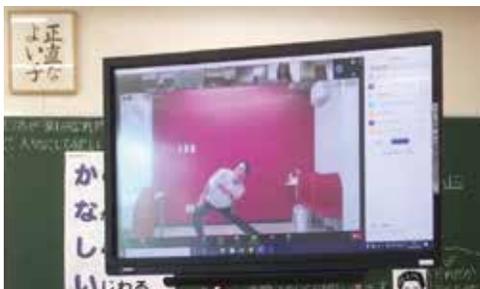


このような状況下ですが、子どもたちは、純粋に「できるようにになりたい」「上手になりたい」という向上心を忘れずに取り組んでいます。その姿は、頼もしく、これからの成長が楽しみです。  
 (文責 四年担任)

### GOGO 五年生！ ピンチはチャンス！

「ピンチはチャンス！」コロナ禍の大変な中、五年生は登校できなくても、のりのりで「挑戦」を合言葉に、自宅で、楽しく、運動しようとして、「日本ストリートダンススタジオ協会」さん主催の、「キャリア教育プログラム」に応募し、幸運にも全国十二校に選ばれました。

Zoomでのくぬぎの授業では、大阪とライブでつなぎ、インストラクターさんにご指導いただきました。子ども達も、担任も大感動！喜びに笑顔があふれました。また、もう一つの企画として、「怪獣のパレード」を学年の歌として練習しています。



学校再開後も、ダンスや歌で、楽しく、そして七十周年記念の今年、「皆を元気づけたい！」そんな熱い思いです。GOGO 五年生！

### 実りの秋「稲刈り」

天候が心配される中、稲刈りが無事に行われました。五月の連休明けから、農家の佐藤さんにご指導いただきながら育ててきた稲は、予想以上にずっしりと実りました。学校に登校できなかった期間から、自宅でも、バケツ稲を植えて、心をこめて育て、しっかりと収穫できた子もいたようです。稲を育てることを通して、農家の方のご苦労を感じました。

(文責 五年担任)

### 六年生 コロナ禍で得たもの

コロナ禍の中、五月末日まで登校禁止期間となったことを受けて、Zoomでの学級活動や授業が始まりました。画面を通してではありましたが、友だちとつながれた喜びに笑顔があふれていました。機器の操作にもすぐに慣れ、さすが六年生だと感心しました。



Zoomでのやりとりに慣れたころ、さらにGoogleクラスルームでの授業が始まりました。課題をオンラインで提出したり、提出した課題に対してコメントを返信したりすることができるようになりました。

学校が再開しても、せっかく使えるようになったものは活用していこうと、Google クラスルームで家庭学習の補助教材を提供しています。また、Zoomを活用して、キャリア教育のトークショーを開催しました。ゲストティーチャーを招待し、職業についての話をしていただきました。ゲストティーチャーの話を聞くことを通し、今自分たちが頑張っていることが将来につながっていることを実感し、モチベーションを上げることができました。Zoomを使えるようになったからこそお招きできるゲストの方ばかりでしたので、貴重な経験となりました。

(文責 六年担任)





コロナ禍の中、最後まで実施できなかった明星祭ですが、無事実施することができました。子どもたち楽しんでほしいという思いから、生まれた企画です。当日の様子をお届けします。協力してくださいました保護者の皆様、ありがとうございました。



科学実験・キャラクター・バラエティーの三種類のくじを引いてから、さらにその中での番号くじをひきました。友達と一緒に回っていても、運命の分かれ道で別々のエリアへ！出口で何が当たったか、見せあいっこをしていました。



釣り竿とバケツを持っていざ出陣！魚が釣れると、どれだけ釣れたか、重さをはかりにゴー！ぴったり百グラムを釣った子や、ゾロ目を出す子もいました。「釣れた！」の声がかかります、笑顔溢れる素敵なお時間でした。



「えっと。四たす二は六だから……。」と考える子ども達。ここでは、箱の中から数ボールを三つ取り出し、その数を足した答えが十一以上だったら大当たりというゲームが行われました。次にいくつを引けばいいのかを考えながら挑戦する姿が素敵でした。



一人三投で入った数字の分だけ点が得点となります。二か所で行ったにもかかわらず、長蛇の列となった時間帯も。入っても外れても笑顔いっぱいの子どもたちでした。



「ぴったり賞！」の大歓声。先生方が挑戦しても成しえなかった百グラムを五名の子ども達がぴたりとあてたのでした。あと何グラム？と計算したり、数を数えたり、試行錯誤して、楽しんでいました。



三人から五人のグループになってクイズを楽しみました。偶然、その場で出会った人たちがグループになり、一緒にクイズをした人もいました。景品のベッターマンで遊んでみましたか？



お父さんブースやクイズコーナー、子どもバザーなどが催され、笑顔あふれる企画でいっぱいでした。



(文責 明星祭実行委員会)

# コロナなんかに負けないぞ! 星魂たくましく

## 新型コロナウイルス対策・最前線レポート

「自分の席に座って議論していても、見えないこと、知らないことは多々あります」(オードリー・タン)



### 明星中学校・高等学校における 新型コロナウイルス感染症対策の経緯

- 二月二十七日、安倍総理(当時)、三月二日から春休みまでを臨時休業とするように要請。
- 三月一日、高等学校、各教室で卒業式を行う。
- 三月二日～三月二十三日、臨時休校。
- 三月二十四日～四月六日まで春休み。
- (四月四日、新クラス発表)
- 四月七日、緊急事態宣言発令。**
- 四月七日～五月六日まで休校継続・構内閉鎖。(四月七日～四月十日、各学年、時差登校。教科書・副教材・課題・P.E.配付、諸連絡など)
- 四月十四日、電話による「心のケア相談」開始。
- 五月七日～五月三十一日、登校禁止期間・遠隔授業(Zoom, Classi, Googleclassroom)。
- 五月十一日、校長メッセージその1
- 五月十四日、校長メッセージその2
- 五月十九日、校長メッセージその3
- 五月二十五日、緊急事態宣言解除。**
- 五月二十七日、校長メッセージその4
- 六月一日、「時差・分散方式登校」による対面授業と「在宅」での遠隔授業に基づく隔日登校開始。
- 六月二日、東京アラート発動。**
- 六月十一日、東京アラート解除。**
- 六月四日、校長メッセージその5
- 六月十五日、図書館前での本の貸出・返却受付開始(貸出は事前メール予約・入館不可)。
- 六月十六日、校長メッセージその6
- 六月二十八日、部活動再開(～十八時〇〇分・日曜・祭日活動可)。
- 六月二十九日～七月十一日、三時間(四時間)で実施してきた時間割を、通常の六時間(七時間)に戻し、カフェテリア再開。
- 図書館利用再開(入館可・七時〇〇分からの朝自習は不可。八時三十分～十七時三十分)。
- 七月十三日、「時差・分散方式登校」による対面授業と「在宅」での遠隔授業に基づく隔日登校、継続決定。
- 七月二十三日、期末考査開始。
- 七月三十一日、終業式。
- 八月十九日、始業式。
- 八月二十日、全員登校・対面授業開始(四〇分授業)。
- 九月一日、四十五分授業開始。
- 九月五日、体育大会(高三)。
- 九月十二日、体育大会(高二)。
- 九月十九日、体育大会(高一)。
- 九月二十九日、体育大会(中学)。
- 十月十五日、中間考査開始。

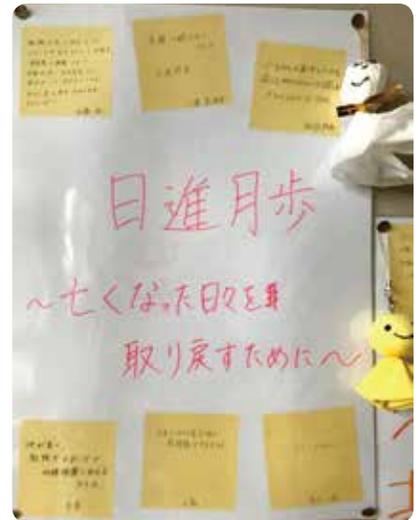


3月3日、誰もいないグラウンドとテニスコート

通常の対面授業がスタートしてから三週間が経過し、校舎にも活気が戻ってきた九月中旬、ある教室のボードに掲示されていたクラス目標を眼にしたとき、しばらく、その前から動けなくなってしまう。そこには、次のようなサブタイトルが記されていたのだ。

「亡くなった日々を取り戻すために」  
授業終了後、これを書いた生徒を探し、あえてこの漢字を使ったのか、と尋ねてみた。

「そうです。僕たちの喪失感を表してみました」  
この半年のあいだに、楽しみにし



クラス目標

きない「哀しみ」が今も流れつづけているのだ。

秋田大学が大学生や大学院生を対象に実施した調査（秋田大学学生のこころとからだの調査・COVID19による社会生活の急激な変化が与える大学生のメンタルヘルスへの影

響・二〇二〇年五月二〇日～六月十日・対象五千百十一人）に抛れば、

回答者の一割以上に中等度の「うつ症状」が見られた、という。

ましてや、精神的にも未熟な成長段階にある中高生である。

この予測不能の試練を、リアルタイムでどのように受けとめているのかは、まったく予断を許さない。

一見、元氣そうに思われても、深い喪失感との葛藤の中で、危うく均衡を保っている生徒もいるだろう。

秋田大学では、その予防因子として「誰かに相談する」「運動する」の二点を挙げている。

十月現在、多くの生徒は、しっかりと前を向いて学校生活を送っているようだ。それが「日進月歩」というタイトルに決然と示されている。



奈良朝時代の貴族の邸宅跡と伝えられる、講堂脇に聳える松

いつまでも嘆いているよりも、「亡くなった日々を取り戻すために」現実と向き合い、勇ましく前進していく、という決意が伝わってくる。

「疾風に勁草を知る」（『後漢書』「年寒くして松柏の凋むに後るを知る」（『論語』）という言葉がある。

強い風が吹いたときにどの草が丈夫であるかがわかるように、寒くなって他の木々が枯れはじめても松や柏はいつまでも青々としているように、困難に出遭ったときにこそ意志の強さや真価が試されるのだ。

次頁上の写真は、六月中旬に撮影した授業中の光景である。

三月二日から止まったままなのだ。そして、まだ心の整理が追いつかないうちに、音をたてて過去から倒れてきたドミノが、このさきに予定されていたことまでも続けざまに崩そうとしている。

海外への修学旅行、明星祭、生徒会活動、試合、大会、コンクール、ヤングアメリカンズ等々……。

この「亡くなった」という言葉は、多くの生徒の気持ちを簡潔に代弁しているように思われる。

一見、元氣を取り戻しているのかのように思える生徒の心の底には、よく眼を凝らさなければ見ることので

分散授業を実施している関係上、クラスの半数の生徒しか来ていない。Aグループの生徒が一つ置きに配置された座席に座って授業を受けている一方、黒板前には、iPadが三脚にセットされていて、自宅にいるBグループに属する残り半数の生徒へ向けて遠隔授業が行われている。事前に講習会もなく、手探り状態でスタートしたこともあって、先生自身がZoomやiPadの使用法に習熟していないので、音声や画像が届いていないなどのトラブルに見舞われ、生徒から連絡を受けた先生が職員室から飛んできたりと、まさに



分散授業

「戦々恐々」とした環境で行う授業は、いつも以上に神経を使った。

しかも、クラスが半分に分かれているため、そのグループが登校した日に、すこし余裕をもってプリントを配付しておかないと、自宅で授業を受けるときに、その日の「課題」をiPadで提出できない、という不都合が生ずる。

担任の先生は、もっと大変だったにちがいない。授業の他に、朝終礼、諸連絡、生徒の下校後は教室の消毒作業も待っている。

ある若手の先生に「普段は毎日遅くまで部活動があるけど、今はそれ



廊下に置かれた除菌スプレーで手を消毒！

がないから、楽でしょう？」と尋ねると、日焼けした顔のいろもいくぶん褪せつつあるその先生は、ためらうことなく首を横に振った。

「いまのほうが疲れます」

ストレスは、なにも学校だけで受けているとはかぎらない。通勤中、あるいは、多くの制約がある私生活においても、降りやまない霧雨のように絶えずストレスに晒されている。そして、それは生徒も変わらない。いや、むしろストレスに対する免疫力が弱く、どのように処理すべきか、という経験知に乏しいぶんだけ、つらいと思う。



図書館の開館を待ちかね、本の貸出に訪れた中学生

六月十五日、図書館の出入り口に長机を出して、事前にメールで予約しての本の貸出・返却が再開したが、新型コロナウイルスという「濁流」によって寸断されてしまった図書館への小径が、すぐに復興することとはなかった。実際、ようやく多くの生徒が訪れるようになるまでには、まだ四か月の歳月を要したのであった。

八月二十日からは、待ちに待った全面授業が始まった。

だが、いつもの活気からは、まだほど遠いものだった。それも当然のことであろう。クラス替えになって、



対面授業



ヒブリオバトル

初めて顔を合わせるのだ。なかには、まったくの初対面という者も数多くいる。しばらくはソーシャルディスタンスを取って、互いに様子を窺っている、といった日々が続いた。

それでも、九月中旬になると、ようやくやわらかなクラスや友達に慣れてきたのか、休み時間や昼休みなどに活発に動きまわる姿勢が見られるようになり、学校も賑わいを取り戻してきた。

そこに一役買ったのが、体育大会やヒブリオバトル、SDGs推進活動などの、クラスや学年単位でのイベントであった。こうした企画へ向け



体育大会 玉入れ

て、まだ頑なだった生徒の心が雪解けのように瞬く間にほぐれていった。

一方、この時期、つらかったのはマスクを装着した状態で授業をすることであった。

六月一日からスタートした分散授業は「生徒の命と健康を守る」ために、消毒、ソーシャルディスタンスの確保、換気、三密を避けるなど、徹底した対策の元で実施されてきたが、マスク&フェイスシールドも、その一環であった。

フェイスシールドを装着するのは初めてで、いくら透明とはいっても違和感があるのは否めない。授業に



体育大会 大縄跳び

熱を帯びてくると呼気で蒸れて窒息しそうになるし、視界が曇って手元の教科書すら見えにくくなる。

また、こうした条件の中で、生徒に対する発問も巡回指導もできずに授業をするというのは、ソーシャル・ディスタンス以上に生徒との間に心理的距離を感じるものであった。幸い、フェイスシールドに関しては、日ならずして、現実的ではないという理由で「装着義務なし」との指示が出された。

こうした措置は助かるが、猛暑を迎えたこの季節においては、マスクだけでも結構応えた。こちらの方は、

六月当初よりも九月下旬になってから、ボディブローのように、じわじわと体力を奪いはじめた。ひどく息苦しいし、いつもサンドバッグを引きずって歩いているみたいな疲労感がある。「先生、寝ても、寝ても、疲れが取れないんです」と訴える生徒や、授業中や考査時間中(十月)にトイレに駆けこむ生徒も例年以上に多かった。

『Library Eye』第7号(毎月一日発行・保護者向けの図書館便り)にも書いたことだが、まだいつも通りの学校生活に「戻れない」生徒もいる。そのぶん、私たち大人がふだ



パンダくん、お鼻がでてますよ!

んから気をつけて見守っていく必要がある。

十月十三日、理化学研究所がスーパーコンピュータ「富岳」を使って飲食時の飛沫の拡散状況を調べた結果、話をする人の正面よりも隣に座る方が約五倍の飛沫を浴び、斜め向かいだと、正面の四分の一程度に留まることがわかった。マスクをつけずに話をするとい分間に九〇〇個、大声を出すと一分間に二千五百個の飛沫やエアロゾルが飛んでいる。空気が乾燥する冬は、飛沫やエアロゾルが広範囲に、かつ長時間飛散しやすく、特に感染リスクも高まる。



紙芝居の読み聞かせ

理研では「部屋の湿度は70%程度に維持するのが適切で、換気も重要」としている。

これに先立つ十月一日、「昼食時のガイドラインが守れないのなら、カフェテリアを閉鎖する」との注意がクラッシュで全生徒へ向けて流された。カフェテリアだけではない。教室や三階のテラスで複数の友達と向かいあってオシャベリをしながら飲食することも感染リスクを高める。ロックのライブ会場と、クラッシュのコンサート会場と、どちらが感染しやすいか、というのと同じ理屈で。

文部科学省の調査に拠れば、八月三十一日現在(六月一日)、児童・生徒の感染者数は千百六十六名、教職員百九十四人、幼稚園関係者八十三人にのぼることが明らかになった。国立国際医療研究センター国際感染症対策室の忽那賢志医長は十月現在、「第一波が終息しつつある状況」としながらも「会食は避けるべき」と注意を促している。

今、学校で最も注意しなければならぬのは、先生の目が届きにくい昼食時だろう。忽那医長に拠れば、飲食店を利用した際の感染者数は、利用しない人の二倍にもなるという。

学校の施設を使って千七百名近い生徒を対象にアクティブな教育活動が行われる以上、どうしても一定の限られたスペースに多くの人間が「集合」せざるをえない。

その状況の中で私たちにできることは、まずは専門家の意見に耳を傾けることと、自分でも感染症対策についての正しい知識を身につけて、これを実行することだろう。

十月十三日、図書館に「かわいいお客様」が訪れた。コロナ禍で外へ遠足に行けなくなった明星幼稚園の園児たち約九十名が先生たちに連れられて紙芝居を見にきたのだ。

全員、小さなマスクを付け、廊下から入ってきてから出ていくまで、じつに静かであった。

十月三十一日現在、新型コロナウイルスは世界各地で依然として猛威を振るっている。特に、欧州では新規感染の拡大が深刻化し、フランスでは約一か月の「外出禁止令」が発令されたのに続き、イングランド全土でロックダウンの措置が取られた。

世界保健機関(WHO)は、北半球の国々は「危険な綱渡りの状況」を迎えている、と警告を発した。

新型コロナウイルスの感染拡大をいち早く封じこめた台湾の立役者



手を洗う

の一人であるIT大臣オードリー・タンは、このように語っている。「ウイルスを防ぐ最良の方法は石鹸で手を洗うことで、二番目に良いのはアルコール消毒をすることです」





## With Corona

# 新型コロナウイルスの影響による新しい生活様式を、生徒は、どう受けとめたか？

### 学校あつての私

高校三年九組  
名取穂花



新型コロナウイルスの影響により、高校二年生も思いがけないタイミングで終わり、所属していたダンス部の引退公演もできず、くぎりをつけられないまま高校三年生となり、大学受験へ向けての勉強が始まりました。

四月、高校三年生になって初めての授業は、オンラインの課題配信でした。三月から始まった休校期間は、一ヶ月ほどで終わり、四月からは登校して、いつも通りの対面授業ができると思っていただけにショックでした。例年ならば、本格的に受験勉強や進路相談がスタートすべき時期であるのに、直接、そうした指導を受けることができず、大きな不安を感じました。さらに、本年度からは新大学入試にギアチェンジされると

いう情報を聞いていましたが、何がどう変わるのか、どのような対策をすればいいのか、この休校期間にはアドバイスを受けることができず、とても混乱しました。

五月からはZoomを利用したオンライン授業が始まりました。ようやく課題配信の授業から脱して、モニター上ではありましたが、先生方の授業を受けられるようになりました。

私は、オンライン授業が始まると聞いたとき、すごく便利なものだろうという先入観を抱いていました。が、実際、授業を受けてみると、通信環境の不具合や先生方との連絡のやりとりなどがスムーズにできないなど、多くの問題が出てきました。私の方も、対面授業ではないため、多少の気の緩みもありましたし、他の生徒がどのくらい勉強しているのかもわからず、受験生として気持ちの切り替えができていない自分にも焦りを感じていました。

六月になると、分散登校というかたちでしたが、待ちに待った対面授業が始まり、先生と生徒が同じ空間にいて授業を受けられるようになりました。オンライン授業が長かったぶん、学校で授業が受けられることのありがたみを感じることができました。質問したいことをすぐに聞くことのできる環境や、友人同士で勉

強を教え合ったり、楽しく話せたりする環境は「当たり前」に思えますが、とても嬉しかったです。

八月二十日の二期期からは全面登校となり、受験に向けて本格的に取り組み始めました。

私は、総合型選抜(AO)を考えていたので、夏休み中から本格的に小論文対策を始めました。新型コロナウイルスの影響でオープンキャンパスが中止になってしまい、まだ受験する大学もはっきりと決まっていなかったのですが、小論文対策に詳しい図書館の先生を尋ねて相談すると、私が受験する学部に関する過去問をくださったり、進路に関する本や資料を薦めてくださいました。その推薦図書の中から、大学で研究していきたいテーマも見つけることができ、ほんとうに感謝しています。

また、先生方が放課後に面接練習の時間を設け、人前で話すことがあまり得意でなかった私を、きめこまやかに指導してくださいました。

新型コロナウイルスの影響もあって、受験対策を始める時期が少し遅かったのではないかと自分でも気にしていたのですが、私たち受験生のサポートを先生方が全力でしてくださったので、少しずつ受験に対する不安が薄らいでいきました。

四月からの自宅学習期間と六月か

らの対面授業の期間を通して、あらためて学校の大切さを感じる事ができました。学校という整った環境で生活できていることに感謝をし、残された学校での時間を大切にしたいこうと思います。

高校生活最後の年の多くを、新型コロナウイルスに奪われてしまったことに悔しさを感じますが、この経験によって学校の重要性、友人の大切さを痛感すると共に、自分自身の生活や世界の現状について考える時間が増え、得られたことも多かったのではないかと思います。

この大変な状況を乗り越えた受験生として、受験本番ではベストを尽くす決意です。



二月十八日、突然に休校になるとの発表がありました。考查直前であ

ったこともあり、なんだか不思議な気持ちで重たい荷物を持ち帰った記憶があります。一年間過ごしてきたクラスと急に離れることになり、とても悲しかったです。学校休業期間が始まってから、高一の時間が終わってしまったのだと、やっと実感が湧きました。

三月からスタートした自粛生活では、学校から出された課題を出したり、友人と電話したり、ずっと見たかった映画を見たりと、初めは充実していました。しかし、だんだんと何の予定もない日々になってしまいました。毎週、学校から出される課題をすぐに終わらせ、古文単語や休み明けテストが行われる教科の勉強をやっていました。みんなに会えない中、自宅での勉強をしっかりと行えるか不安でしたが、友人とZoomで顔を合わせながら勉強するなど、自分のモチベーションを下げないようにしていました。午前中は勉強し、午後は好きなことをするという一日の過ごし方が定着してきた頃に、オンライン授業が始まりました。

オンライン授業では、最初は慣れないことがたくさんあり、これからずっと学校には行けなくなってしまうのではないかと不安にもなりました。でも、毎朝同じ時間にホームルームで先生の顔を見て、同じ時間に

授業を受けただけでも生活習慣が整い、学校休業期間とは比べものにならないほど、毎日が充実していきました。オンライン授業では高二の新たな範囲を勉強することができ、今までの不安が少し軽くなりました。

一方、進学関連の学習は各自で行うものであったので、自分の将来を決める重要な進路について、先生や友人に相談できない不安があったことも事実です。オンライン授業の期間は、特にその不安が大きかったです。また、よく声が聞こえなかったり、黒板が見えづらかったりと不便を感じずることもありました。それでも、先生方が様々な工夫をしてくださった授業を受けることができ、ほんとうに良かったです。

今、考えれば、私たちがオンライン授業に対して不安に思っていた以上に、先生方は大変なことがたくさんあったかと思えます。この期間は慣れないことがあり、疲れを感じることもありました。これでやっと授業が再開したのだ、という喜びが大きかったです。

そこからはあつという間で、すぐに分散登校となり、全員登校となりました。分散登校では、クラスの半数と顔を合わせることとなり、初日は、とても緊張しました。やはり、直接の授業や学校の雰囲気はとても

楽しく、安心できるものでした。部活動も再開し、少しずつ私たちの「当たり前」のはずだった日常が動きはじめました。友人と直接会って話したり、先生とすれ違って挨拶したり、そうした何気ない日々がどれだけ自分たちにとって大切なものであったのかを、私は痛感しました。そして、全員登校が始まると同時に、それまでの空白期間は、もう二度と戻ってこないのだ、と思いました。中止となってしまった体育祭も、行く先が変更となった修学旅行も、私たちが想像していた「当たり前」のはずだった高校二年生の生活がどんどん崩れていくたびに、やるせないくやしさを感じました。そして今も、その思いが消えることはありません。

そのような思いがあるからこそ、私はこれから、空白となってしまう日々を取り戻す気持ちで、充実した日々を増やしていきます。多くの制限がある中で、誰よりも一日一日を楽しみ、みんなともっと思い出に残ることができたらいいなと思います。消えてしまった日々を嘆くだけでは前に進むことはできません。「当たり前」というものはあまりにも脆く、それが「当たり前」ではないという事——そんな、ずっと前からわかっていたはずのことを私たちは体験し、あらためて思い直すことが

できました。  
だから私は今、全力で前を向き続けていこうと決意しています。



今年の三月二日、突然、学校が休校となりました。二月下旬から流行りはじめた新型コロナウイルスの感染者が増えてきたための対応でした。休校が始まったばかりの頃は、状況がよくわからずに、特別にお休みをもらったような気分になっていました。しかし、それから登校できない日々が続き、あつという間に一年生が終わってしまいました。そのため、三学期に企画し、楽しみにしていたお別れ会もできないままクラスのみなどと別れてしまうことが残念でした。それでも、一年生最後の登校日、久しぶりに友達や先生に会えたこと

がなによりうれしかったです。休校期間中は、学校で授業を受けることができないぶん、たくさんさんの宿題が出ました。その宿題を終わらせるために、一日の勉強時間の目標を立てて頑張る、という毎日でした。そして、自由に外出ができない生活で運動不足にもなってしまいました。

三月末、衝撃を受けたニュースがありました。コメディアンの志村けんさんが亡くなった、というニュースです。とてもショックで、あらためて新型コロナウイルスの怖さを知り、不安にもなりました。

新学期、登校できないまま二年生になりました。仲の良い友達と別のクラスになったことや、新しいクラスの様子もわからないままオンライン授業が始まることなどに不安を感じていました。

そして、いよいよオンライン授業が始まりました。最初は、Zoomの使い方に慣れることや、オンライン授業のための設定準備をすることに大変さを感じていました。

しかし、先生がわかりやすく説明をしてくれたおかげで、それほど苦勞せずに使えるようになりました。それでも、テレワークをしていた父と同時にZoomを使用していたためか、インターネット環境が悪くなっ

て困る日もありました。授業については、わからないところや難しいところもありました。けれども、先生がわかりやすく説明してくれたり、わからないところを個別に質問したときには丁寧に返信をくれたりしたことで、よく理解することができました。

オンライン授業であっても、しっかり勉強することができるとわかり、勉強に対する不安は少しずつ取り除くことができました。

でも、新しいクラスにいつなじめるのだろうか、という不安は、いつまでたっても消えませんでした。

登校できない日々が続き、早く学校へ行きたい、早く友達に会いたいと思うようになりました。

その後、一日置きに登校が始まり、二学期には毎日登校できるようになりました。また、毎日、友達と会え、



楽しいランチタイムを、ふたたび！

ふだんの学校生活に少しでも戻れることがうれしかったです。行事については、体育大会が九月に規模を縮小して行われました。当日は、とても盛り上がり、新しいクラスのみんなとも協力することができました。

しかし、私がいちばん楽しみにしていた明星祭はまだ行われていません。昨年は初めての明星祭で、友達と回ったり、友達の発表を見たり、美術部の作品を見たりと、楽しい思い出がたくさんできました。規模を縮小してもいいですから、今年も、楽しい思い出をつくりたいと思います。

コロナウイルスが流行したことによって、これまでは「ふつう」だと思っていた生活が「ふつう」ではなくなってしまうました。

休校やオンライン授業を経て、今、私たちは毎日学校に通えるようになりました。ここまでくるのに先生方はとても頑張ってくださいました。と思います。先生方には、とても感謝しています。

私にとって学校で大切だと思うことの一つは勉強で、もう一つは友達と学校生活を楽しむことです。

友達と楽しくお弁当を食べたり、昨年のような明星祭ができたたりする日がくることを楽しみにしています。